

東京電力福島第一原発事故から 10 年の知見

## 「復興する福島の科学と倫理」

服部美咲著：丸善出版

今年、東日本大震災から 10 年。東京オリンピックは復興しつつある福島の姿をみてもらうことも掲げて開催された。原発事故後の福島県については、過剰に不安を煽る情報も少なくなかった。本書は福島県の状況について①放射線被ばくの影響はどの程度であったのか②事故後の心の健康問題③甲状腺検査の問題点と廃炉汚染水対策の 3 部構成で紹介している。

著者はウェブメディア「SYNODOS」で科学コミュニケーションに関する記事や福島に住む人々の暮らしを伝える「福島レポート」の編集長。

放射線被ばくについては、多くの研究が重ねられた結果、福島県は放射線による次世代への影響を心配する状況にはないと断言することができる。一方で避難生活などによる住民への影響が深刻であることも明らかになった。最大のリスクはうつ病の発症で、原発事故による被災体験はなかなか他の人に伝えにくいことも原因となっていることなど医師へのインタビューを含め具体的な事例が紹介されている。

甲状腺検査はチェルノブイリ事故後、被災地では子供の甲状腺がんが増加した事実があったため、「福島県でも子供たちに甲状腺がんが増えるのではないか」という不安の声があがり、県は事故当時 18 歳以下であった県民を対象に甲状腺検査を開始した。この結果、2020 年 6 月までに 252 人に甲状腺がんが見つかったが、本書ではこの検査の継続は不要とする専門家の意見が採り上げられている。

甲状腺検査は、現在では必要の無い疾患の検査を継続しており、過剰検査と思われる。デメリットも説明せず集団検診として実施するのはやめた方がいいという意見は傾聴に値する。「可能性はゼロではない」という表現は覚悟をもってもうやめるべき。専門家の姿勢が情緒的に偏向し科学的に誤ったものとなれば県民に深刻な健康被害をもたらすという医師の意見は、現在のコロナ対応の局面にも繋がる指摘ではないだろうか。

大変丁寧にまとめられたレポートで、福島県の現状に関心のある方々に一読をお勧めする。

(シニアネットワーク連絡会 齋藤 隆)

エネルギーレビュー誌の書評欄 2021 年 9 月号掲載